

## (61)

氏名(生年月日)	瀬 下 明 良
本 籍	
学 位 の 種 類	医学博士
学位授与の番号	乙第813号
学位授与の日付	昭和62年 3 月20日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当 (博士の学位論文提出者)
学位論文題目	早期離床と術後肺機能の関連についての臨床的検討
論文審査委員	(主査) 教授 織畑 秀夫 (副査) 教授 羽生富士夫, 教授 武田 佳彦

## 論 文 内 容 の 要 旨

## 目的

従来より早期離床の重要性は認識されており、外科領域においても種々の合併症予防のため、術後早期よりの離床がすすめられているが、実際には十分に実施されているとは言いがたい。肺機能不全は術後合併症の中でも頻度が高く、様々な予防法が検討されているが、早期離床も有効な手段の一つと考えられる。以上の立場より著者は実際の術後離床状況について、また離床の程度による肺機能への影響について調査し、早期離床と術後肺機能との関連について検討した。

## 対象および方法

当科において全身麻酔下に開腹手術を施行した成人患者86名を対象とした。但し術前状態が不良な例や、術後に重大な合併症を生じた例は除外した。予め患者の半数には十分に説明して早期離床をすすめてあるが、すべて自発的行動にまかせた。離床程度を知るために患者の運動量を万歩計を用いて、術後7日間毎日測定した。肺機能の指標として、血液ガスを術前、第1、第3、第5、第7病日に、肺活量および1秒率を術前と第7病日に測定した。

## 結果

1. 術後の運動量は全体的には1日毎に増加していくが、同時に患者間の個人差も広がっていった。術後第3病日までの運動量は、年齢、性、疾患、手術時間

および術前の肺機能などによる影響は少なく、予め早期離床について説明した患者には増加が認められた。第4病日以後の運動量には、手術時間の長い例、術前の肺機能の低い例に減少がみられた。

2. とくに合併症がなくとも術後に肺機能は低下し、低酸素血症が生じた。このPaO<sub>2</sub>の低下は第3病日に最大となり、回復するのに約1週間を要した。なおPaCO<sub>2</sub>に変化は認められなかった。肺活量は第7病日ではまだ低下していたが、1秒率に変化はなかった。

3. 術後早期(第1～第3病日)の運動量が多くなると、PaO<sub>2</sub>の低下も少なく、回復も早くなり、早期離床は術後肺機能の低下を軽減すると考えられた。但し第4病日以後に運動量が増加してもその効果はなかった。

4. 術後PaO<sub>2</sub>の低下を軽減するのに必要な運動量は、第2病日より離床し、トイレ歩行を行なう程度であり過大な量ではなかった。

## 結論

術後早期より離床を開始することにより、術後に見られる肺機能不全が軽減されることを示した。またそのために必要な運動量はそれ程過大ではなく、積極的に離床をすすめれば多くの患者で有効な結果を得れると考えられる。

## 論文審査の要旨

従来術後早期離床の重要性が認識されてはいるが、実際には十分には実施されていない。著者はこの点に着目し、成人開腹手術例について術後運動量の程度を万歩計を用いて計測し比較検討した。

その結果、翌日トイレに行く程度の軽い運動による術後早期の運動量の多い例に術後肺機能は低下が少なく、回復が早いことを明らかにした。

本研究は学術上価値あるものと認める。

### 主論文公表誌

早期離床と術後肺機能の関連についての臨床的検討  
東京女子医科大学雑誌 第56巻 第12号  
1093～1103頁（昭和61年12月25日発行）

### 副論文公表誌

- 1) 過去5年間の手術既往のないイレウス例の検討  
日救急医学会関東誌 7 (1) 114～115 (1986)
- 2) 慢性腹側膵炎を繰り返した膵管非癒合の1例  
胆と膵 7 (2) 227～234 (1986)
- 3) 乳癌に対する縮小手術につき、特に根治性と術後経過よりみた適応条件の検討  
日外科系連合誌 11 79～82 (1984)
- 4) 石灰乳胆汁の2例  
東女医大誌 54 (11) 1217～1222 (1984)
- 5) メッケル憩室の mesodiverticular band による絞扼性イレウスの1例  
東女医大誌 54 (11) 1223～1225 (1984)